

巨乳な女探偵・夏海静花の管理ファイル

夏海静花は二十七歳の女探偵だ。身長百五十八センチ、バスト九十一、ヒップ九十二の体は夏になるほど、見えてくる。彼女は高校卒業後、すぐに探偵事務所に入社した。その頃でも、すでに巨乳になる兆候は出ていたのだ。成人になってからは、今の体型に到達した。探偵として、その体は不利になるかということ、それは違う。

世間的に巨乳の女性は頭が悪いとされている。そこを使えば、捜査もやり易くなるのだ。

探偵社に入社してすぐ、夏海静花は浮気調査の助手をする事になった。男子所員、日名気弓雄(ひなげ・ゆみお)に同行する。日名気は三十歳、長身で痩せ型だが、顔は平凡でハンサムではない。眼は細く、鼻も低い。

夏海静花は丸顔で、目と唇が大きい。鼻は団子のようで、美人といえるかどうか微妙だ。クリクリと動く眼は知性的なので、知能の低いアイドルとは違った雰囲気だからだ。

それより男性なら彼女の胸と尻に視線が、いってしまうだろう。二十七歳の今の彼女の顔の雰囲気は女性検事の顔と同じだが、入社した当時はまだ、女子高生的雰囲気もあった。

日名気と同じ車でターゲットの男性を尾行する。この業界は女性からの依頼の方が多いのだ。夫の浮気を疑っている女性は、多い。しかし、探偵社に頼むとなると結構な費用がかかる。

福岡市のような百五十万人の都市では、月に数百の依頼はある。そこで静花の探偵社も毎日のように浮気調査をしている。

今回の依頼は福岡市会議員の妻からの依頼で、議員は四十五歳の男性で、一見、真面目そうだが、今回以前も疑わしい行動があったという。市会議員といえども、五時過ぎからの行動は自由だろう。とはいえ、その妻にはそうはいかない。

静花は車中でレポートを読み上げる。

「相手はキャバクラ嬢ですね。撮影されたものを見ると、美人に見えますか。」

日名気は冷静に、

「福岡のキャバクラ嬢は、大抵そうだよ。市会議員さんも、色好みだね。」

とハンドルを回しながら助手席の静花に答えた。

夜も十一時だ。福岡市には六十以上のラブホテルがある。

東区の志賀島近くにあるラブホテルに市会議員の車は走っている。探偵社二人の尾行する車も、その後を追う。

静花のレポートに写っているキャバ嬢は色白で痩せた、笑顔の美しい女性だ。二十代前半だろう。全身が写っていて、前からだが尻の横に張っているのは、よくわかる。スカートはミニで、胸は上に向いた形のよい美乳だ。顔は真面目そうで、キャバ嬢とはいえ、乱れた感じはなかった。

二人がラブホテルに入るのを写真と動画で撮る。日名気と共に静花も撮った。静花は、

「成功ですね。帰りますか。」

と場を離れたいようだ。

「出てくるのを待つんだ。ぼくたちも入ろう。」

「えっ、まさか・・・するんですか。」

「心配するなよ。彼らの隣の部屋が空いていれば、そこに

入る。コンクリート・マイクで音も拾えるかもしれん。」

そのラブホテルは無人のフロントなので、気軽に静花たち二人も入れた。市会議員たちの入った部屋の隣の部屋は空いていた。日名気は、

「ラッキーだ。入ろう。」

無言でうなづく夏海静花だ。日名気が先にドアノブを回した。後からの静花がドアを閉める。コンクリートマイクといっても色々だが、探偵社の使うコンクリートマイクは九万円くらいはする高価なものだ。録音機能もある。日名気は、すぐにコンクリートマイクをセットした。耳にレシーバーを当てると、

ちゅっ、ちゅっという男女のキスをする音が聞こえた。それから女の声が、

「奥さんと別れるって、本当なの？」

「そのつもりだ。もう、子供は大学を出て社会人になった。
新しい妻が必要なのかもしれない。」

「嬉しいわ。東区のはてまで来て、セックスする必要もな
くなるのね。」

「そうだな。これが最後かもしれん。」

ばさばさ、と服を脱ぐ音がする。

「きれいだ。君の胸は白い美乳だよ。」

「恥ずかしい。」

聞いている日名気は、音から二人の場面を想像する。

市会議員は全裸になったキャバ嬢の乳房を左から右に、
それぞれ吸った。全裸の市会議員の股間のイチモツは巨大
になっている。

「とても変わった体位で君としたいと考えていたんだ。」

二人は立っている。感じて身をくねらせたキャバ嬢は、

「どんなポーズで、するのかしら。」

「君は体が柔らかいだろう。ブリッジを、ベッドの上でしてくれ。」

「ええ、いいわよ。」

彼女はベッドに乗ると全裸で乳房を揺らせながら、両脚を開き、体を後ろにそらせて両手をベッドについた。豊かな陰毛の下淫裂がピンクの口をパツクリと開いた。

「これで、いいかしら？」

天井を見つめながら、彼女が聞く。議員は、

「上出来だ。すぐ、行く。」

議員は彼女の開いた白い足の間に膝をつくと、大きくなったモノをキャバ嬢の淫穴に挿入していった。

「ああん、こんな体勢だから、とても感じるわ、ああん。」

とブリッジの体勢のまま、彼女は声を上げた。二人は、その体勢のまま結合して三十分は過ぎた。

日名気は退屈そうに、

「長いな。」

と呟く。潮風が室内にも入り込んでくる。波の音がザバーン、ザバーンと窓の外からは小さく聞こえる。日名気は眼を静花に向けると、

「終わったよ。先に出るからな、おれたちは。」

と指示する。日名気の後から静花も部屋を出た。

後は二人がラブホテルから出てくるのを、写真撮影、ついでに動画撮影もすれば終了だ。日名気と車に潜んでいると、市会議員が出てきた。だが、彼ひとりだけだ。日名気は、

「そんなはずは・・・。もしかして、あのキャバ嬢を殺しているかもしれない。」

と口に出す。

「それは大変ですね。あとは警察の仕事でしょう。」

と静花も動揺する。

「とにかく君は、ここにいてくれ。おれは議員の後を追う。」

「はい、わかりました。」

日名気は市会議員の乗り込んだ車を追いかけて、車を発進させた。あとに残された静花は、近くの大木の陰からラブホテルの玄関口を見張った。しばらくすると、一人の尼僧が大きなバックを下げてラブホテルから出てきた。真っ黒な眼鏡をかけて、頭は剃られてツルツルだった。

その尼さんは、十メートルは歩くとタクシーが現われて、それに乗り込んだ。黄色いタクシーは海岸線の道路を福岡市に向って走っていった。

静花は、

「尼さんがラブホテルから出てくるなんて。」

と一人呟いた。

(そうだわ。あの尼さんは、キャバ嬢の変装に違いないわ。)そう思った静花は運よく近くに來たタクシーを停めて、

「あの黄色いタクシーを、追って頂戴。」

と指示する。急発進する静花の乗ったタクシーは、黄色いタクシーが山の中に入っていくのを追った。

キキーッ

と土の上に音を立てて黄色いタクシーは停まった。そこは山寺だったのだ。タクシーから降りた尼僧は寺の山門へ足を運ぶ。

発車した黄色いタクシーの跡に、静花の乗ったタクシーは停まった。降りた静花は石段を登っている尼僧の後を、静

かに尾行する。石段の上に辿り着いた尼僧は振り返ると黒いサングラスを外して、

「珍しいわ。こんな夜中に、参詣してくれるなんてね。」
と静花に言葉を投げた。

顔を見るとキャバ嬢ではない。セクシーな尼僧で三十代前半か。静花は、ビクツとして階段を登る足を止めた。尾行は失敗だったのだ。くるりと尼僧に背を向けて降りようとする静花に、

「ちょっと。探偵さん。もう、あの女性はラブホテルを出ているわ。わたしの後ろの方を歩いているのを、振り返って見たから。男と同時にラブホテルを出ないようにしてたわね。あんた、証拠写真でも撮ろうとしてたのね。」

と尼僧は呼びかける。

静花は階段を降りる足を止め、尼僧に振り返ると、

「そうです。すみません。」

「まあ、もうあの女を追っても間に合わないから、今日はうちの山寺で泊まっていきなさいよ。」

「ええ。でも・・・。」

「わたし独りの寺だから、のんびりできるよ。」

静花は日名気に携帯電話する。

「失敗しました。」

「だろうな。今日は直帰で、いいから。」

「すみません。」

「議員は無事に、ご帰宅だ。奥さんは腹の虫がおさまらないだろうけど。」

「キャバ嬢は遅れて出たようですよ。」

「うん、それも考えてはみた。そうだったらしいな。明日になれば、又、やり方を考えるさ。」

ソー、と携帯電話は切れた。

静花は先ほどの尼僧と同じ部屋にいる。寺の中だから和室の畳の部屋で、仏像が飾られている。その仏像の姿は座っていて、手が六本もあるのだ。顔は恐ろしげな表情である。静花は正座して、それを横目に見ると、

「変わった仏像ですね。」

と素直に感想を洩らした。尼僧は、

「愛染明王といってね。愛欲の仏さんなのよ。足は崩していいよ。この寺の住職は、わたしだから。」

静花は正座の足を崩すと、

「ラブホテルには、どうして・・・。」

と聞く。

「ああ、あれね。あれは檀家の若い男とやりまくるために

行ったのよ。最近は、そこまでしないと護寺費を遅らせる檀家があるのね。一応、用心のためにサングラスをして、わたしが先にラブホテルを出ているけど。あんた、この辺の人じゃないみたいだから、教えてあげるけどね。」

「なるほど、分かりました。」

愛染明王の像の前には、赤い蠟燭が二本立てられて火が、ともされていた。ゆらゆらと動く蠟燭の炎が、薄暗い室内をほの明るくする。潮の打ち付けるザバー、という音も聞こえた。

目の大きな女住職は好色そうな顔で、

「AV も色んな分野の女性を出したけど、尼さんは一人も出てないみたいね。わたしが出てもいいけどさ。」

と話すと白い歯を見せた。

そういう過去のあった静花も、今は独立して事務所を構えている。女探偵が何故有利なのかと言うと、相談してくるのは大抵、女性だからだ。だが逆に男性が相談者として依頼もしてくる。それは調査相手が女性のため、男性の探偵より依頼しやすいという事になる。

おかげで夏海静花の事務所は仕事が舞い込んだ。

「忙しいわね。そうだ、助手も女性にしよう。」

静花は一人呟くと、インターネットに募集広告を出したのだ。それも何処かの広告代理店にではなく、自分のブログ、「女探偵の孤独なつぶやき」に

当探偵事務所では、助手を募集しています

とブログの右側面に書くだけでよかった。その日の内に事務所の電話が鳴った。

「はい。夏海探偵事務所です。」

「あの、わたし助手になりたいんです。ブログで見ましたよ。」

と若い女性の声がした。

「ありがとう。さっそくだけど、面接に来てくれないかしら。」

「ブログに載っている住所ですか。」

「そうよ、中央区の薬院ね。電車の駅を降りて、歩いて五分かな。」

「わかりました。今から、いいですか。」

夜の七時だ。外は暗くなっている。

「いいわよ。九時ごろから尾行だから、早く来てね。」

「ええ。風のように飛んできます。」

くす、と静花が笑うと電話は切れた。それから十分もすると、事務所のチャイムが鳴った。

「はい、どうぞ。」

と静花が大声で答えると、ドアが開いて清楚な若い女性が立っていた。髪は肩にかかる位、少し長身であるけど胸の膨らみもそれなりにある。スカートの横幅の広さは豊かな尻を想像させた。眼は、つぶっているように細いが、睫毛が長くて女らしい。茶色のスカートに白い上着で足はスニーカーを履いている。

「よく来てくれたわね。探偵助手って厳しいのよ。その代わり、給料はいいけど。そこに座ってよ。」

静花は応接テーブルのそばにある横長のソファを指差した。面接女性は、ふんわりと腰掛けた。静花も応接テーブルをはさんでソファに腰掛けると、

「履歴書を見せて。ありがとう。霞露子(かすみ・つゆこ)さんね。二十歳。若いわね。短大を出てアルバイト・・・

今もしてるの?」

「ええ、深夜のコンビニとかもしています。」

「それなら探偵の仕事には、入りやすいと思うわ。浮気調査は夜が多いのよ。今夜もわたし、行くけどね。」

「徹夜もできます。」

「それは、いいな。あと、女探偵は体を張る事もあるのよ。」

静花は立ち上がると霞露子の背後に回り、露子の上着の上に突き出した二つの乳房を両手で鷲掴みにした。露子は首をひねると、

「あはっ。感じますう。」

と悶えた。その露子の顔に自分の顔を静花は近づけてキスした。ヌル、と静花は自分の舌を露子の唇の間から差し込むと、露子の赤い舌と絡め合わせる。露子は眼を閉じて、

じっとしている。静花は露子のスカートの中に手を入れて、
ショーツの上から露子の割れているスジを指でなぞる。

「いやあん。」

露子は口で抵抗したが、両足は大きく広げた。ショーツの上からでも、露子の突起した淫核が静花の指には感じられる。それを捏ね回すと、

「ああん、ああ、ああーん。」

と露子は悶えて、唇を開いた。忘我の表情を静花は見ると、
指を露子の淫核の突起にかぶさったショーツから手を離して、